

札幌孝仁会記念

外国人のがん患者積極受入れ

3つの放射線治療装置の周知へ

新型コロナウイルス感染症に伴う渡航制限で、訪日外客数は一時的に減ったものの、2023年12月にはコロナ禍以降で最多を記録。日本政府観光局によると、コロナ禍前の水準を上回ったという。西区の札幌孝仁会記念病院(齋藤孝次理事長、入江伸介院長・276床)は、16年に現在地への移転新築と併せて、札幌高機能放射線センター(SAFRA)を開設。国内で唯一となる陽子線治療・サイバーナイフ・トモセラピーの3つの放射線治療装置を保有し、患者の症状に応じてコンビネーション治療を行えることが強みである。医療インバウンドが追い風となる中、外国人患者増への期待が高まっている。



札幌高機能放射線治療センターで働く、
医療コーディネーター

日本は、男女ともに平均R-1の高度装置の保有台数、CTやM数など、医療インフラが充実していることから、医療渡航の目的で、訪日する外国人患者は多い。子線治療(陽子線・重粒子線)は、放射線治療装置の提供が盛んなが、それでも米国などより不足している。今後、日本は割安な医療を受けられるという期待が高まっている。

近年は、高度な放射線治療や質の高い検査を受けられることから、がん治療を目的とした外国人患者が増加している。国内では、陽子線治療装置の保有数が増え、水素の原子核(陽子)を加速させてエネルギーを高める。外国人患者の滞在期間が長くなり、特定の深さまで照射する必要がある。昨年は、第4次観光立国推進基本計画の新しいインバウンド

腫瘍の手術と奥の正常組織を傷つけずに深部の腫瘍を照射できるため、術後の局所再発などの原発性がん、単発性の転移性がんに効果を発揮する。全国の粒子線がん治療施設25カ所うち、陽子線治療は19カ所あり、道内では北大病院、札幌道心会病院、札幌孝仁会記念病院の3施設で、陽子線治療はSAFRAの大きな強みとなっている。

サイバーナイフは、自在に動くロボットアームにエクステンション装置を備え、多方向からピンポイントで腫瘍に放射線治療ができ、小さながん病巣を得意とする。トモセラピーは、放射線治療装置とCT装置を組み合わせた構造で、強度変調放射線治療(IMRT)ができる。がん転移のある患者に、正常組織を避けながら照射するため、副作用が少ない。

こうした3つの特徴の放射線治療装置を使い、16〜23年の間、SAFRAで実施した外国人患者への照射部位数は122部位に上る。肺、子宮頸部、肝臓の順に多く、3つの治療装置を併用する例もあった。19年の年間治療数は50前後と最も多く、23年は20症例前後に留まっている。訪日が一番多かったのは中国で、次いでロシア、韓国と続いた。

一方、同時期の日本の照射部位別症例数は、2413症例のうち脳が1番多く、肺、肝臓の順と異なる。外国人患者の診察情報を現地の観点から、海外の地国際コーディネーター仲介会社と協働体制を築



腫瘍にピンポイントで照射するサイバーナイフ

業者から、身元保障機関を通して受け取る。患者の診断書をSAFRAの医師に見せて治療可否を確認。治療の受け入れが可能だと判断された場合に、治療方針や治療費、医療通訳者が少ない。また、治療期間、急変時対応について事業者を介して伝えることとなる。また、患者が治療を希望した場合、渡航スケジュールを「外国人患者の受入れ規模を拡大するためにも、決めて、来日後、すぐに治療を行えるよう院内調整をし、準備する。」とのやり取りを大体1週間以内で行う。患者は病気で急いでいることが多い。素早い連絡ができるよう意識している。

外国人患者を受入れていく中で、邵氏が課題と感じているのが「帰国後のフォローアップが難しいこと」と話す。日本では定期的な治療を継続するが、外国人患者の場合、帰国後の情報提供がかなり少ないという。「全体の1割程度。自国に戻って再発した場合でも、また一から診療情報の提供が行われる。ケアの継続性の観点から、海外の訳の問題解決に向けて「力したい」と意欲を燃やしている。現在、SAFRAでは、陽子線1回当たりの線量を増加させ、照射回数を少なくした前立腺がんの治療を開始している。通常22回の照射を12回にまで減らすことができ、今後は、日本人だけではなく、外国人患者にも周知していく考えだ。



海外の仲介業者に対応する邵氏